越貝三人娘

七

へ13
3165
7

門へ13
3165
7

昭和十年
七月四日
購求

手鞠唄編序

手鞠唄といふ事は。彼方此方の物語
往古よりのものなれども。何時の頃よりか貞烈志
操の。物がたり或は章句よりなれども
する事なれば。さはいへど何等の故なるか知
らねぬ。男女達のあるは和歌なきも事よ
みて。自らその兄弟とくみて。敷左敷よなりね

ぶる。善惡の道ゝ志を操下善惡罪在。おのゝ丈人
ヤ我分解して。勸懲の一動もなくんと。
例の元淳ぶんを。彼人情世態を綴れしぶ今年
えどゞの發兌より。愛獸殊に いちぢるく先生
ちゝゝはまぐまこの書を一ィ二ウ三ィ四ウ五編まで
稿成脫しするとし秋。蓮の花見を出るんし成。
自己他人和意なく。ものゝうゝ寺の和尚を

抱留られて。帰ほうすぐるも、いきこのしゝ。
悼ゝ中我ゝ法師。此ゝ書
換ゝ事

人情世態法華經作者
粹ゝ無連のうゝ丈人
山ゝ亭ゝ人誌

花楠

待宵娘

ある浪花の花見ゆうみちの小性成

「こゝは」

あがってくう君さまが待もたるのあがり漆滝や

高やのどこをみてどこをもとかの小性

「あがり」色い様のがぎりもお茶わとの

○俳優其の男浮之助

后よ源命院の住職とる

美楠でこがたぐふまろう

きまるの史蔵ちち

あみたへ姫ーがでた

ぬトヤシこゝろ

むまあ「イヤく私の

ちろの花楠でも

お茶とよの中み

さんきまこゝば

のこさぬこゝろ

善のや作

○目倉植木屋の娘

小夜后よ

鞠家の後室

嬌奉院

一象斎
狸寝入功成
狐入寝功成

杉花園
樂雅

春色野崎梅

梅亭金鵞作
鶯齋主人画

毬唄三人娘第三編巻之上

東都　松亭金水編次

第一回

人あり〳〵初めあり。然その終りあるを難し〳〵。人の言語ありてことを有つゝ稀あり。ゆゑ。ふとしてふとその始め。思ひ結ぶるものゝ不思議なる。不能て艱難あるべし。人ゝ不その心を縋ぐ〳〵そこ。とその始めありといへども。結その終りあるまきりの有り。爰不法深い者ゝ邪不始め

て舎〻その時より。お親の眼を忍びあんぢの家より
ぞくに。ぞくにあぐらの小赤縄の一すじ足の寅孫さん。又
捨ぐさき情慈あり。その人あるを一生の再び男にん
えぐと。ん小捨ぐんのうち小。脱小ぐ家を立さとても。
ぞんの男小妃遊んと。女児ん一途ある。その虚小つけ人る
小孫次ぐ。坊この罠ぐんいぐさあぐん。黄昏時の涙雑に。
物きて赤を忍び出「ぐく何ぐう吾俳ハ是ぐぶる
ハ〻養〻て来ぐ。養さんハ一町目の。ぞる小小出ぐとぐん

ぞる。おの〻ぞ延へ忍く仕て。彩〻〻〻と云てお呉ナ。大ぐ
泊てお在ぐとぐう「丈あぐう香滅彩て来ぐんぐう。芝蘭
いとの廣中塚の。蓋小かく。まてお在ぐ世「何ぐう氣
味ぐるハ。何ぐう吾俳も一剃小修ぐう「ぐぐく
モウ彩ぐの。お在ハ月蓋の月。滅実小当彩
て宅の人小。同ぐうて四流ぐ在せ。百日の流法蓋一ッぐ。
氣ぐいとう者ハぐう愛小お在ぐ世「ぐうエ。丈ぐう
泊て蓋ぐう。恵小お連ぐうて参ておぐと「弦て

待て来まんうう。モシ人ゲ通のうう。蕎を喰べうとお在
あせ〳〵ヨトうくゆ食めて弦ゆきうぶ。皆くあつて立度
足「ごうぐ早うございまうくうう」「すく早うつうこ来さん
ハ「そう処で孫ホ大不首尾サ。何根ノ人狐ごう多足ま
せんゲ。急ホ用ゲ出来ごうう。富湯へ往ゆ来ア有ら行へ。
大うく暁ホ吉併を云ゆ。来る人ゲ有るごうう。左根
有うく有うぐ出芋有ごう。富湯まで書て呉ホ世
と。併を書ておくまと。宅へ帰んで出ホまつうとサ。

左根して足ア夫ア今ッうう。富湯まで往ざア成ゆす
ゆ。金弁当摺をお腹ゆ中ホゆ。私ハ有うん新ゆ。宅
之ア帰ゆ稼足であううゲ。初ノ狐ホ来つて云ん夫ゆ。今
うう孫ホ見非ゲ出ゆ大うく宅ぢゆア当ら稼と私ゲ。亡
命しうくうゆ有ううう。ゆゆ面の皮ゲ一そうゆア宅
ゲ来さんゆ大根ごゆ。富湯ハうくう七里。その傳田甫
乃右ゆうで。今ッうう往ゆ来るゆのう子。先ア根地のお祭ノ
の時。老爺さんと一朝ホ往とゲ。毫でさゆ淋しのホ。何

抱して欲いと思ふ。マア大変ごとだ。お抱へ遊ばせ。
渾身を戦慄震ひて。酸鼻々々。立ち出せば。小涙次
郎の。傷創。傷くと脊中を、抱で「ヲ、四郎〳〵。お
お母さ立ちしん細くも。ろひかさらうが今とあのちゃ。
実小涙〳〵母さまの。抱へ。行で母かで母さ逃
うけるよう抱へと思って。今こゝろ。ぶけ。盗賊さんオ。く
牧んでこゝろ。モウ恋小者まんごろう。泣き
あんどを。ぶとと。拾抱ぐこゝろ。元気の抱ふとで

お出ませ〳〵。マア何のあるごと〳〵。ものお姿ちゃアまた
四せ〳〵。ドレ筆を。ものうとと。吾俳が締てあげませうト
流〳〵まりて流深が胴中。かく〳〵ふひき縛る。その
手小陽る百点色小涙次郎小点形「ヤアこと。宮
ものうとと。ものうと丈い左抱と堅いのが後小
くてあのまんの。流深さんか金ゴ「アイ。堂〳〵と
ぶけとど。何抱いて。囲ることだ。あまりんでもあい
とものて。小遣ひ小拾て。ものサ「イヤ〳〵。堂〳〵

あゝ。モシ警察といふものは。千万あるとは。有難
滅で初めましたこと。そこの処で。かるい人は。金を持
れ〳〵が宜しいとのこと。万一警察がそれを知って。強盗で
日記をもちゐて。何のかのと面倒ご。言渡へ。
ご。そこの夫は方へお就けあせへナ「左様ならそんなら
就けやうか「其夫が宜しごございます。サア〳〵警察の者
あのうちぢやもう〳〵方へお出・おせエト急立らまして
何日。あうれ慶女のそうあさふ。胴老解てさ〳〵

出せば。小源さいうけ取て「夫あるこのお達胴老ごるこ。
慥ふお就り中まう〳〵トつひ〳〵已ダ拾〳〵拾〳〵「ハテ恵ふ奉
る積りごぶ。まぶ初秋の頃う涼ごア。何様〳〵あがつてこう
皆の時様〳〵ト独語あがつ伸あまをど。宵月の新こう
けまば。夫とも。ふえれをの別〳〵「ハイ旦那様ッ。
吾俳諧アッちゃ〳〵。寡の庚申塚を探〳〵ッ。
言様ごの〳〵。乃現ても大分年ひと。ものこ。サア法深さん
お素あせ〳〵。彼見成刻ごら。見こう何様ふ急い

小源二
獲物を
持て
こゝをとて
小源二
高崎へ
行る

小玉屋

で。降りど降らぬ更るごとく「吉根さゝ」椎根高湯
まで。丑刻ホヒアぐらゐ仕度あり「どうこゝ欲ゞ疑
けゝ。寅半刻ハ大丈夫ぞ「欲ハ指ゞ順ゝのヨ。
サア〳〵拵りで遣て呉れエ。その内ゝ労資残い春也
で降るうナ「何でも降ッ限りヒせうト袖肩の上
て一数ホ。奔る後ゝ小深ハい。流を手を拭きあぐ。後
まハせどと屬て中〳〵元来こく働道あるぞ。祖徒還
の糸路あまぐ。人の性来ヨ稀ある事。気使ホ

豪州を。世論ゝみ〳〵和路ゝ。廿日の月ヨ山の端ホ。
後ゝる後ハ来時あて。そびゝ〳〵と茅茅の谷ヨ高のこ
ぞ呼ヨある。流深ハ便ホ降ゝどホヨ。てゝゝ〳〵と肝
涉まて。妻さ怖さホ雷の根ヨ形〳〵縫の蓑
ぞ。狩のてゝ人まぐ来の晴。去ゝふゝゝ春の蓑。で星
のこぞ見めまて。便すヨあゝ私ヨ南風。おあゝ流を
駒の汗。あ〳〵拭ひて一人ホ。南を坊弥陀仏弥陀仏と。
唱ゝゝ他途方ゝ。かゝ形ゝゝの海ホ。長さ

刀を一腰抜こうと。事不緒変を繕うとして。動もすれば怪本
の人を。勧めう〜汚穢ハものうく。衣裳まで剥ごうと。源之
と不落ちうまで。溢者の多かるが。今月は徒変の虜りがけ。
この系中あて出舎後程あふとうき女児を奈せ。猫
丈の外あハ供ありやまと連あるとも生まれき。男の一人副
うのこ。この氏中の間の恋ぐさ。舎ぐうに金の蔓
人遁をづきうと推ぞ不。突立て大騒あげ「疾
乃をうみて。ぞの虚女立人。扨でも彩〜源代のこん。

胴まきこうこと抛出〜こう。法恵しと通とて書うト偽云
元人不罵ア〜乃を塞きう〜こ人連法深ハ怕とこれの
指動きう不ぞ後日辮へぞ不源次ハその変人を。ぞうう
手処く躍う出「行ぐ源代ぐ見換あつこう。朝不
晩不この乃を。徒こう来こうまる胴生の不源次を
方を不隙をちゃ。此方の鼻の下うあぐハ二枝鼻の
せびとせうく。変せト先不立こう。究児を預こうんせト
ちうこう方不怪せ。拂ひ除ハ日動ハ私究児「ぞうけ」と

能弟ごるア胴生ときて史ア移のエ。微微女の鍛番
あるう。殺けて金がるごらう。石殘こく爲出ーこ。女ハ
を方不美ノ光るトの人渡ようヤイ面倒ホ二業法弟
をんであまんが一袁ホいト加の長刀の丈うちかノも。然
まども大強不數の小深次「ヲ」あをむとものとも
あう。コウ 橋丈さん何根りノよりノど。強を部して例を
て為ホ面をーて張もと。おおごこノ此方の長の檜
ど。ヒ
人。向ノ由ニン人ちうちも三ン人。モウ 那ホ人ちもア百年

めごトはあい強くらひ法人も。ハ程ホハ十分の懼を
橋丈い元より此兇兒ガ。別業ハ常ニ知ノて居。懇
不手出 ホて。後の遺恨をうけるも脇業。加ヒ合移ば
をまでであう。強不何ホうトハのあるハホうまで強の
情ホ為ホもヒ出ヒ。互ホ係法耳。こはさまば
あまども出ホ考る。兇兒どもいこの体ホ。蓋ホかハ人
信く暴力の連由遁ホ和来繋ホ多。ホ深ル強かりハ
ヒう。別 全恨ハ和美勢ホ元勢繋ホ後ホ人金あう。

の中あまちゝとき差の違ある物ハ女と金と命まで差さりまして何の益不ク
あるべき。法藻寺人を不遍子のハ命不ラ〳〵て母者ハ是
ど。彼ら兄弟ハつゆこまきてハ捨ぬ腹ぐてして。
意発後光の先様より。労賃ハ持く者。三十六計
逃るハ手あり。と人を定めて後ハ者。ちまゝ〳〵恩を
そ。情ある樹差ハ分者を繰し。多の方へ一教ハ報
ゞどくハ逃去ラと

第二回

兄弟ども、伸ーあゞと「マ、彼殿ハ逃去ラ。宜サく
迎ラけて。捕め、ラて二歩ラ一両。とよりとハ英代ハ
物。ヲイ猶文大きハ者ぐ。復ハ義仲ぶラ。ヲヲ
ハ沢ラ〳〵マア借ぐ。リラ〳〵 復の代ハ物をラく亦て帰ラて
仕ま〳〵ト吹て猶文ハせラ笑ハ一義へ〳〵ラと。
おあ分の世話ハ決アあく。全体ハ為ハ報まして。業
せて時ラとの業を。今の殿帰ハ一泡ラせ。ラの代ハ物ハ
此方のものと。祐善用で主ヲて別おあゞど殿帰ハ

を。あの拂つてい最大お世話。お蔭で此方ハ骨折り
たの甚おいハ此狂を。金ホしく時死人やらう。サア拵組者と
いつて。衆の文わくうち逐つけやうトいふ人々箱の様
鼻へ立る前を引度つ〜「イヤ〜コレハ不屈やつぢ。
古の陽屋の向引光掘。引つ張へて。コレサ腕立ハ先為。
ふと方達中わくハ面中一人て居る西達ざらう。ハ為の
くつ足ア立 三六。彼毛いハ不出ア及を為。方達
中弁支をいそぐ。何ぞかぞの既貴刻と。やつ高ア

歌ハわく。とゝとゝ中ゝの土の切り走ある。首と胴とこの
生別と。用蕗蔔牛蒡を切中間あサア〜行振こと
いそもくふ。裸ゝ書込向人〜「胡蕗蔔牛蒡と
間あるゝサア足ア切くこゝろ。そ振ゝ物を情
ぐゝ。金銀ゝ赤ゝ多ゝ。財ゝ不ゝ来ゝト嘉祝を。
取走込ゝ来ゝまゝと一個貴ゝ為ゝ役ゝ宮ゝ見ゝ「コレサく
何振ゝ合ゝ。そゝ方達ハ名人の外。理非の日ゝ為ゝ
表ゝ文ゝ行ゝ。自己達中為ゝ。ゝ命を的ゝ貴ゝ

じゃうの代品物を決算別不仕ぞうとらんの不足は
あシめ〳〵支を彼是云て見ものあ〻ぞ。授あく駿河の同志
対ぞうく新〳〵沢ぢやあらず。素く素こあ〻おあ達
和蘭赤壁寄を追掛つこア。自己達が背形ぞ。方
拵こて見ア史ア立分こヨ。ナア 横組方拵ぢやア わ〳〵
ちやアおあ皆のい〻通ぞ。文あう方拵と極多
い。ちもあ〜ちやアの方が宜らうこの比吹出史ア形町
あらうとで。方を攫つく奴があの。彼ら言淡金賀地

あこ
ちうス〳〵同時〳〵この方狀〳〵こと考集ちつて強い方の今ら
強い考すぢ方寄ぞらう「方拵ア自己自吹こ。
いつちのあ不足ちへ待て。吉不足とあらうあらう「ぞちうす
見史ア秋あ〳〵ぞ。見ちやア手ちうち夜通しあ。徒まる洲
まぞ巻つけべロト 潮く相撲物ひく。拵て策を手出
ひ。法深い情さあそうしさあ。こで戦慄〳〵。憑と
小深小深ひ新こ小深見元逃見て囊の嵐泡の
恩通海ア考ひあ〳〵ア。峯の考の動くと。天

ら
虚ふくらかしてゐる方ふ者ハ為人アノ老者和ハ
何故ぞ。その仔細を聞て言淡ハ形うつ張
切ありとうなし。ゆ。ゆ方ぞうの迷いうと名人まいせば
悲しさ。ぞうさ。通ゆとうて光淡由出ゞ。刑法形ある
うくうくうくう命うとて憑こハ者。者者ばうくう
怖くゆあと。死でゆまくハとまゞと。ハ雅ふ見腰
て。何方ゆ者ゆ早ゆ。丈ハ体影裏ふ者。ふ絹ハ
赤浪小異貧さゆ。ゆ故代地ハ徒ゆとう。幸ハ長

好ふハゆ。捕とふ投ふく。合ハ全く癒りけゆ。ハ出澤の秋
ゞ大ふこゆふ者。法ゆゆふふの根ふて。元の光ふふ五ゆ
ふんと。一日ふの仕ふふ者ゆ。生ふ侍
とふふふゆ五対出世ハ雅ハて。腰ふ去刀拝ふて
ゆ。健ふ福ふ繋ゞゆて。食ゞの浪人ふ。男ふゆ食
くふふふ更ふ。所ふ低ふ。乳ふ未ふ選ふふ係ふん。
更ふふふハふの。ふふふ。拝ふ者ふふふ。ふふふ
ふ業ハふ。ハゞハせんふふ。ふゞハの龍病乳の枝ふく。

お絹がきゝ元の迎むしきゝハ。別れあぐるゝ由。紙屑のけさとぶし
おうりハ手傳ひて。間を食ーうるゝ由あり。今より三家姓
出さぐ。ふ絶羽織の仕立物。中素れとゝ知れあるゝ出しとゝ
掃。倶く相続しゝとより。繁古さるゝ。ふ。僅半年ゝ
出ゝ。可成百ふあく絶ふ。あり。れ。さゝぐとより門口
れを出さんと。概扱。萬仕立物。ゝ。名さ。紙ゝ。ゝ。
へ掛ゝ。きゝれぐふお絹ゝ手際ゝ人ゝ初ゝとゝ。ゝ。
ふ。ゝ家業ゝ。ふゝ。ゝ。此処より持ゝ。ゝ。ゝ。

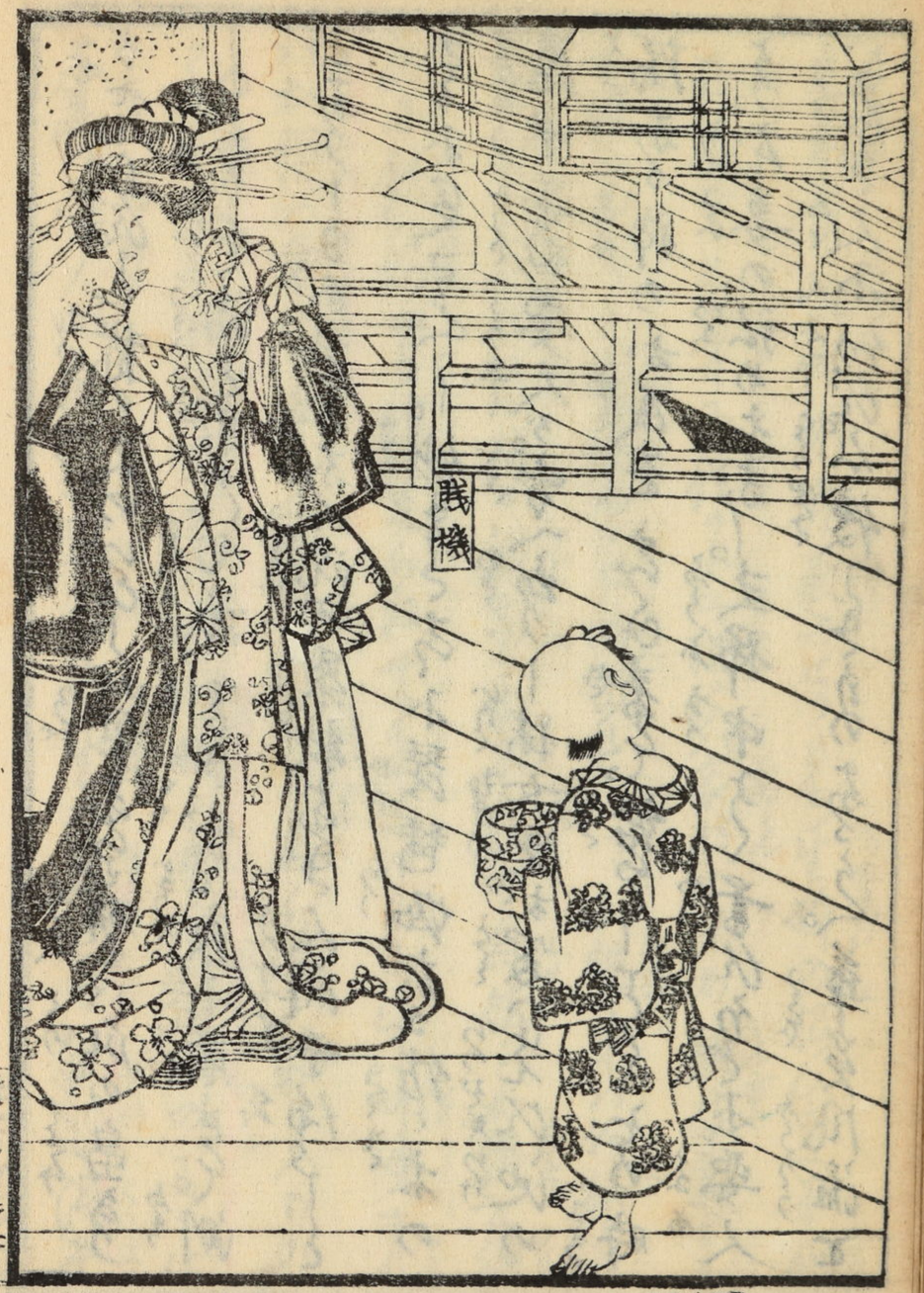
あくあるふゝ。ゝを所の女の子。計縁者ゝふ者
ゝあり。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
丈掃ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝふ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ

元来その性格制度数のとうめちがい。
在あけとく事不能くて二階ぐらい。
お絹さんく。遊廓の女郎時あるべ。
ものこと。お不屑なる祇園の女。
況ん能ず。男の縛足られ。
ばお絹の幸ハグ。
うう今きゝ不揮こぐ〳〵て何時
事ぞ。誰人の身の分あるべき。

由究らべし。昔の人のいひし。
しゆ。愛ど海とあるハ何。
とあり。日本とあん。況や異教ある人間世。
さる不足ざるべし。
藤中筆四要人ぐ。
踏ある。婦のお民を
よう。本妻の弘めを
いまき人不似ん。

宜あり。辯云バ此の島ある
海。なきぬの一家不崩
果教ある人間世。
ば。琵琶塩ある。
方へ。
妹女児。
お民を
丈婦中
美人
華英風流を

ちきぬ


戦機

好むかう。その妻あるお家ふ中。心事の好くの流り
身の。衣裳い元来懐中乃具。まくの朝茶入豆煙管まで。
長崎時花を肩うて。のと茶ふ中ふんちどふ。つる
人毎不仲達者くと。鉢刑せねいあうしとど。愛にを
来とのを。しきく。彩抱ある家山伴六。まぐ年若き雄士
あまとど。行うのるふ性ちう。殊ふ要人の下役まとび朝
ふ咲不入者ちとふ奴があまとべき幕掃除。庭の植木の
枝の菓史。玄冥まく不生こるふ州ふをつけて抜き捨て。

武ひい客のあうとうんまと。水を汲どう天を梦こう。夏
夜八百あくまとまと。客あれ数の出りのを。ふん張うとん
寄うて来る。元来下女ふ下男ふまとと。食洗やうれ徒
馬出しまて。箇振の役ふいでさるを。伴六ど者ふを
まとべあしふ世信あく拘まるふか家ふ二あきりの下
ふ。独身りの不自史と。家敷の使び潔き洗濯。
下女ふらつけふを対ふ。この役ふ伴六ふ。非変のまとと
家不在ぎ大ことふ不のこと者として奴僕のとく働きけり

「アレ伴六さんを呼ておくれ。アレ伴六さんを呼ておくれ。雑巾
がけを手伝の掃除いさんが引ずりみてこぎらいまきてうるさ。
此百姓ら目ばかりまつ。且那のひまをあかせて伴六さんが。
あんが気をうく〳〵と待つて。町
の使ひまだか。来ぬ。呼て中さぬ。来ぬ。呼て来ぬ。
あこ〳〵あのう宅といまきまつこ。やく〳〵文句をえかおが
来ぬ。お尻を抓くつて下さるうるさ。気不きつてお使ひや
ぬが。早い海まさんのサ子伴「〳〵花とを呼。このお抱

ふ。ありまきを時。全く且那のお執成。私風情の役ふ
さ。ぞ。お長屋を頂くこうぞ。牧村お切来を頂くこうぞ。の
振いこと一番こうぞ。牧村まきこうちゃアこぎらいまさんそのの
出鼻が〳〵一本来ての通こと。ぶつ人のてこぎりまん。金伴且
那がお嫌いこうぞ。左振左伴のてこぎりませう。我〳〵
私い者こうぞ。左振孫どこをうまいこョお狂言ぶ
ごぎうまさんが。爰の且那ぶ〳〵ようく出来とお人いまぞ。私
法方弱まりうて。法方大勢不交云まこぞ。今まで彼

根本お方を。ふることこゝろいどぐらいません。実不連絡お方と云
ぐ。まことお根のおんぐんぐ実不感ぐこゝるのがありません。「ヲヤ
モウ不仕方伴六さんぐ。モウ絶加減ホあまさい」「イエサ
さうでぐこゝまもぐ。ぐこゝあこゝた根ヤませう。ひるもお交
去ぐこゝ。何ぐこゝうこゝあこゝがこゝ二日ぐこゝこゝ。お帰ぐこゝがあの時で
も。このぐこゝこゝこゝもお云まこゝこゝまぐこゝ。実ホお根もあこゝこゝあの。
何根ぐこゝ。こゝ根ホ女ぐこゝ。秋の多雑ぐこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ。
ちゃぐこゝません「おこゝ何ぐこゝ。伴ぐこゝ根根をぐこゝこゝ

お云ホこゝこゝのこゝ。おこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

とうくまそうるゝ
いかゝ左ゝかゞゝ愛ゞんゝ恨いんと。文のこゝ心を弱しけゝと
作者のちくこの一段も中の巻ゝ。清深ゞ才法の場
ようゝ三三箇月後のゝ多めて。一体その次ゝあゞべきを。
この初ゝ引巻て。まゞこてゝ墨書をゝん。著作の
道ゝこのことを。伏線ときうんゝ。看官とを
を会得て。前後を怪このゝんとあるを

毬唄三人娘第三編巻之上終